
思いつき短編集

イワセ ジン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思いつき短編集

【Nコード】

N7419Y

【作者名】

イワセ ジン

【あらすじ】

ただただ、思いついた拙いお話を書きなぐっているだけです。お暇つぶしになれば幸いです。長い物語を書くほどの構力が無いもんですから^^；

嘘つきは、真実の始まり

いつの頃からだろう…彼が嘘をつけなくなってしまったのは。

彼が物心ついた時には、もう既に嘘がつけなくなっていた。

嘘をつこうと思った事は何度もある。

だが、つけないのだ。

彼が嘘をつくとき、世界中のすべてが、彼の嘘の通りになってしまうから。

「何て便利な能力なんだ！」

そう思う人もいるだろう。

だが、考えてみて欲しい…。

友人から携帯へ電話が来る。

「今、どこ？…これから出て来れない？」

今、仕事から帰宅したばかりの彼は、今から再び外へ出るのが億劫だ。

「ごめん…まだ会社なんだ。今日は遅くなりそうだから…」

彼は、思わずそう嘘をつく。

言い終わるや否や、彼は自分が再び会社に戻っている事に気がつく

…。

目の前には膨大な量の仕事…今日は遅くなりそうだ…。

こんな事が繰り返される毎日に彼は嫌気がさしていた。極力、嘘をつかずに生活していたが、人間は全く本音の部分だけで生きていくのは無理だ。全く嘘をつかずに生活する事など到底できなかつた。

自分の嘘がいつから真実になるようになったのか、彼自身も記憶していない。

最初に彼がその事に気がついたのは、彼が中学生の時だった。

彼は、大切な友人と些細な事で喧嘩をした。

「うるせーよ…死ね！」

彼は怒りに任せてそう言い放った。

その友人と2度と会う事はなく、次の日、彼が座っていたはずの席には一輪差しに可愛らしい花が活けて置いてあった。

それまでも何度か同じような事はあった。

小学生の頃には「バカ！」と罵倒してやった相手が、次の日から登校して来なくなった。

「でぶ！」と悪口を言った相手は、次に会った時には見る影もなく太っていた。

子供らしい見栄から「ウチには全種類のゲーム機が揃っている」と言う、その日のうちに自分の部屋には様々なメーカーのゲーム機が届いた。

まさか…と言う思いもあった。

だが、友人を死に追いやったのは自分だと言う漠然とした確信も同時に得た…。

そんな彼の会社でのあだ名は「イエスマン」…。
上司の意見に対して、入社以来、すべてイエスと答えているのが所以だ。

そうしようと思った訳ではない。

ただ、「どう思つかね？」と上司に尋ねられた事を面と向かって否定する等、なかなか出来ないから「そうですね。」とお茶を濁す。すると、その瞬間から上司の意見は自分の意見にすり替わる…。

周りから見ると、上司に言われて考えを180度替えた「イエスマン」にしか見えないのだ。

だが、会社の人間すべてが、彼のことをそう思っていた訳ではない。1人だけ…彼の同僚が、薄々彼の不思議な能力に気が付き始めていた。

普通は起こりえない事でも、彼が何かを口走ると、それが現実になる…そう言う場面を何度か目撃すれば、そう思う人間が現れても不思議ではない。

その同僚だけは、彼のことを「イエスマン」と揶揄する事はしなかった。

それでも嘘をつけない毎日と、会社の人間に揶揄される毎日は彼にとって苦痛でしか無かった。

万一、「首相なんて誰がやっても同じだよ」なんて口走れば、明日

から自分が首相になってマスコミにケチヨンケチヨンに書かれるかもしれない。

もしも、迂闊にも「世界が核戦争に突入した」とでも口走れば、両親、友人は勿論、自分も死んでしまう。

最早、この世に苦痛しか見出せないでいた彼は、世界平和の為に…という口実も得て、自ら命を絶つ事にした…もう嘘をつかない生活も限界だったから。

会社の屋上が上がってみる…結構高い…けど、この高さからだったら確実に死ねるし、もしかしたら途中で気を失って、痛みを感じる事もなく逝けるかもしれない。

早く飛び下りなければ…会社のビルの下には人だかりが出来始めていた。

屋上の柵を跨いで、後は飛び下りるだけ…一歩踏み出すだけで楽になれる。

「待て！」

背後で男の声がした。

彼の能力に気付き始めていた、あの同僚だった。

「早まるなよ…会社でも上司に一目置かれているじゃないか…何が不満なんだよ」

と彼は飛び下りを阻止しようと交渉を始める。

「君には解らないよ…」
今更、自分の特殊な能力を他人に説明する気にもなれない。

「君は…もしかして、嘘がつけないんじゃないのか!?!?!…君が嘘をつくと、それが真実になってしまっただ…そうだろ!?!」

彼は、自分の能力を見抜いた同僚に驚きの視線を向けた。
そんなにも自分の事を見ていくれる人がいる事に対する驚きもあった。

彼は喜びとも悲しみともつかない表情で、ひとしきり笑った。

笑った後で

「僕が嘘をつくと、それが真実になるって!?!?そんな事ある訳ないだろう?」

彼は、最後の嘘について、何も無い空中へ一歩を踏み出した…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7419y/>

思いつき短編集

2011年11月22日04時03分発行